

『トム・ソーヤの空中旅行』

—トウェインの新しい試みと失敗—

浅井 みどり

[ 序 ]

1892年 8月10日マーク・トウェイン(Mark Twain)は、彼の出版業におけるパートナーであるフレッド・ホール(Fred J. Hall) に次のような手紙を送っている。

So I have started Huck Finn and Tom Sawyer (still 15 years old) and their friend freed slave Jim around the world in a stray balloon, with Huck as narrator,....<sup>(1)</sup>

トウェインは家族と共にドイツ滞在中に、再びトム(Tom)、ハック(Huck)、ジム(Jim)というお馴染みの三人を復活させ、彼らを主人公にした冒険物語を書き始めた。彼らの冒険物語第三作目に当たるこの作品が『トム・ソーヤの空中旅行』(Tom Sawyer Abroad, 1894)である。トウェインの作品といえば、すぐに『トム・ソーヤの冒険』(The Adventures of Tom Sawyer, 1876)、『ハックルベリー・フィンの冒険』(Adventures of Huckleberry Finn, 1884)の名前が挙げられる程、先の二作品は有名であるが、第三作目に当たる『トム・ソーヤの空中旅行』は同じ人物を登場させているにもかかわらず比較的知名度も低く、批評家の研究対象として言及されることも多くはない。何故『トム・ソーヤの空中旅行』は『トム・ソーヤ』や『ハック・フィン』同様に多くの人々の心を捕らえることが出来なかったのだろうか。その理由を明らかにすると同時に、この作品においてトウェインが意図したものは何かを考察していきたい。

[ 1 ]

『トム・ソーヤの空中旅行』は、形式的には『ハック・フィン』の続編という形をとっているが、『トム・ソーヤ』や『ハック・フィン』と比較した時、三人の冒険の性質が、かなり違っていることが分かる。先ず第一点目は冒険の手段である。先の二作品では、徒歩や筏などといった身近で原始的なものであったが、『トム・ソーヤの空中旅行』では気球 (balloon) という、まさに文明と近代科学の産物ともいうべき乗り物を使用しているのである。第二点目は冒険の舞台である。気球によって、彼らは空間的にも大胆に移動することが出来るようになった為に、彼らが繰り広げる冒険の舞台は、もはやセント・ピーターズバーグ(St. Petersburg)でもミシシッピ河(The Mississippi)でもなく、アメリカを離れ、遙か大西洋の向こう側の国アフリカなのである。そして第三点目は全く違う舞台

に大移動することによって、もはやそこには『トム・ソーヤ』や『ハック・フィン』に見られたような自伝的要素や少年時代への郷愁は含まれていないという点である。以上の三点から考えると『トム・ソーヤの空中旅行』は、トウエインにとって全く新しい種類の冒険への試みであったと言えるのである。またトウエインは、この作品に関してはシリーズ化を予定しており、この事からもトウエインの試みに対する意気込みを感じることができるのである。しかし、完成し発表した後、1894年5月26日の The Athenaeum におけるこの作品に関する評価は次の様なものであった。

Mark Twain may console himself with the reflection that even greater writers than he have found that an attempt to pursue the fortunes of successful characters in a second book has proved a failure; for Tom Sawyer Abroad will come as a grievous disappointment to admirers of the Adventures of Tom Sawyer or his friend Huckleberry Finn.

.....  
Mark Twain has often proved that he has the gift of being amusing; it is a pity that he should squander himself on such a book as this. <sup>(2)</sup>

要するに新しい冒険の中に、かつての輝かしい栄光を持つヒーロー達を投入したものの、全く生かしきれておらず、トウエインの試みは失敗に終わっているというわけである。また、1894年6月の The Bookman においては、失敗作という批判と同時に“the desperate exhaustion of his author's invention in this direction at least” <sup>(3)</sup> とトウエインが作家として行き詰まっていることも指摘されたのであった。

## [ 2 ]

『トム・ソーヤの空中旅行』が失敗作と言われる原因を探るに当たって、トウエインがこの作品の題材をどこから得たのかというのを考えておきたい。

第一に、この作品においてトウエインが用いている気球についてであるが、空を飛ぶこの乗り物は、まさに近代科学の産物といえる。そして、トウエインの科学に対する関心も強いものであった。

I put up a telephone wire from my house down to the Courant office, the only telephone wire in town, and the first one that was ever used in a private house in the world. <sup>(4)</sup>

自伝におけるこの記述からも分かるように、彼は電話や植字機をはじめ科学の産物を実生活にいち早く採り入れ、また、科学者や発明家を讃え、彼らに盲目的に投資し、その一方では自分でもスクラップブックなどを発明しては特許権を取る程、科学や発明に対して熱心な反応を示していた。故に、トウェインが気球に興味を覚え、作品に用いたと考えることは容易である。トウェインの気球に対する認識は、比較的早い時期からあった。1855年の彼のノートブックにカール・プレイス(Carr Place)の記述がある。<sup>(5)</sup> カール・プレイスはセント・ルイス郊外にある遊園地で、そこには気球のアトラクションがあった。乗ったか否かは定かではないが、気球を見たのではないかと考えられる。また、彼がニュー・ヨークにあるハーリー・ヒルズ・クラブハウス(Harry Hill's Culb House)を訪れた際の1867年6月6日の手紙には次のように記されている。“...and [I] did contract to go up in a balloon, but the balloon didn't go.”<sup>(6)</sup> この時には気球が動かず、彼が実際に乗ることはできなかったものの、直接目にしたことは明らかである。これらの経験で印象に残ったのであろうか、翌年の1868年のノートブックには、盗んだ気球でパリから逃亡してきたフランス人の囚人の物語の断片が残されている。この物語は、トウェインの次の言葉と共に途中で中断されているのである。“While this was being written, Jules Verne's “Five <weeks> Weeks in a Balloon” came out, & consequently this sketch wasn't finished.”<sup>(7)</sup> それから24年後、トウェインは再び気球を用いた作品『トム・ソーヤの空中旅行』を執筆することになるのだが、1868年のノートブックの記述以後、気球や途中で中断している作品について特記していることがないことから、筆者としては当時の経験や途中で中断している作品への思い入れが、直接『トム・ソーヤの空中旅行』の執筆動機となったとは考えられないのである。むしろ『トム・ソーヤの空中旅行』はジュール・ヴェルヌ(Jules Verne)の『気球旅行の五週間』(Cinq Semaines en Ballon, 1863)を土台に書かれたものなのである。<sup>(8)</sup> ヴェルヌの作品については、先にトウェインがノートブックの中で言及していることから、その時点で彼がヴェルヌの作品を知り、『トム・ソーヤの空中旅行』執筆に至るまでの間に読んで、印象に残っていたのであろう。実際に、二つの作品を読み比べてみると多くの類似点が見られるのである。気球に乗ってアフ

リカを旅すると言うメイン・テーマは勿論のこと、個々のエピソード——ライオンとの遭遇、飲み水の不足、蜃気楼を見る、オアシス発見、梯子を使っての救出劇、砂嵐に飲み込まれるキャラバン隊など——も明らかにヴェルヌの作品をヒントに脚色を加えて書いたものといえる。また登場人物に関しても、ヴェルヌの作品における三人のリーダー的存在であるファーガソン博士(Dr. Ferguson)の役割をトムが、物事を現実的に見るケネディー(Kennedy)の役割をハックが、そしてファーガソン博士の忠実な従僕ジョー(Joe)の役割をジムが果たしているのである。このような事から、この作品に対するトウェインのオリジナル性は否定され、1894年6月14日の The Academy において “It is more decent to parody Jules Verne....”<sup>(9)</sup> と言及されるように、単なる改作としか見られず、低い評価を受ける一つの原因となったのである。

### [ 3 ]

次に、『トム・ソーヤの空中旅行』において、復活した三人の主人公トム、ハック、ジムが、どのように描かれているかについて考えてみたい。

まずはトムであるが、彼は『トム・ソーヤ』や『ハック・フィン』同様、他の二人とは違い、一応は教育を受けた、好奇心旺盛で、想像力が豊かで、機転が利く少年として描かれている。また、相変わらず英雄的行為を好み、自分が読んだ本の世界を再現するにあたって、彼自身の独特な想像力で解釈した決まりによって行動することをハックとジムに強制するところなどは、『ハック・フィン』の三十二章以降におけるジム救出劇でのトムを思わせるのである。しかしその反面、新たな一面も覗かせているのである。例えば、三人で議論している際に意見が対立した時、ハックやジムに対して、次のような、二人を完全に馬鹿にしきった言葉を発している。“Well, it's enough to make a body sick, such mullet-headed ignorance.”<sup>(10)</sup> 以前からトムはハック達の無知を嘆く様な言葉を発してはいたが、『トム・ソーヤの空中旅行』ではその回数が増えており、彼らとの議論では、容易に腹を立て “I don't want to argue no more with people like you [Jim] and Huck Finn....”<sup>(11)</sup> と話を打ち切ってしまう程、短気な性格を表しているのである。そして、次の台詞がこのことを一番よく物語っている。

“I'm lost in the sky with no company but a passel of low-down animals that don't know no more than the head boss of a university did three or four hundred years ago.”<sup>(12)</sup>

“a passel of low-down animals”, このようなトムへの厳しい言葉は以前の作品には見られなかった。まるで少年の言葉とは思えないのである。

次にハックであるが、彼もやはり先の二作品における性格が引き継がれ、純粹無垢であり、トムとは反対にあまり想像力を持ち合わせていない。

“Now Tom he got all that wild notion out of Walter Scott’s books,....  
.....

I took the books and read all about it, and as near as I could make out, most of the folks that shook farming to go to crusading had a mighty rocky time of it.”<sup>(13)</sup>

トムの十字軍(Crusade)の提案に対するハックの反応であるが、むしろ現実的なものの考え方をする少年として描かれ、トムより理性有る行動を見せることさえある。しかし、残念なことに『ハック・フィン』で見せた素晴らしい成長の跡は無く、第五章で小鳥を殺してしまった時の事を思い出している場面や、第十一章におけるキャラバン隊の死の場面で時折、鋭い感受性とそれに伴って起こる感傷的な面を見せる以外は、無知であることが前面に出されており、その結果生じるトムとの議論の中では、ひたすらトムを負かすことに執着し、勝てば単純に喜び、負ければ不満を洩らす、単なる無知な少年になってしまっているのである。

ジムはどうであろうか。トムやハックに対して忠実であるという面以外は『ハック・フィン』で見せた心の暖かさや優しさはあまり表現されておらず、蜃気楼の場面ではトムの指示にも従わず“... en knows I’s gwyne to die, ‘caze when a body sees a ghos’ de third time, dat’s what it means.”<sup>(14)</sup>と迷信に惑わされ易いという愚かな面が浮き彫りにされている。またハック同様、トムとの議論の場面では愚かさが増強され、単なるハックの共謀者になってしまっているのである。

トウエインは、トムにもハックにも、そしてジムにも『トム・ソーヤ』や『ハック・フィン』における彼らの性格を持たせたまま、再び彼らを描こうとはしてみたが、結果的にはそれができなかった。なぜならこの作品の土台となった『気球旅行の五週間』における登場人物の役割を、性格や立場などを考慮した上でトウエインがそれぞれトム、ハック、ジムに重ねあわせた為に、物語の進行上どうしても彼らに多少の変貌を遂げさせなければ

ばならなくなったからである。『気球旅行の五週間』の主人公達は大人であるのに対し、トムとハックはまだ十五歳の少年なのであるから、当然、彼らの言動を重ね合わせようとしたら無理が生じ、変に大人っぽくなってしまったり、また逆に、それを回避しようとして子供らしさを出すつもりが、却って幼稚になってしまっているのである。故に、三人が持つ本来の持ち味が十分に出し切れなかったところにもこの作品の欠点があるのである。

### [ 結 ]

以上ここまで簡単に見てきたように『トム・ソーヤの空中旅行』は確かに失敗作と言われるだけの欠点を有している。しかし、この作品にはトウェインの様々な思いが込められているのである。彼は作品の中でハックに、気球のことを次のように語らせている。

We was used to the balloon, now, and not afraid any more, and didn't want to be anywheres else. Why, it seemed just like home; it most seemed as if I had been born and raised in it, and Jim and Tom said the same. <sup>(15)</sup>

トウェインは、かつて『ハック・フィン』でハックが筏に“home”を見出したように『トム・ソーヤの空中旅行』においても気球に彼らの“home”を見出そうとした。しかし、結果的には文明と科学の産物である気球の中に“home”を見出すことはできなかったのである。トウェインは彼の作品の中で常々、物質主義、金儲け万能、政治腐敗といった時代風潮、そしてその中でしたたかに、抜け目なく生きていく人間達を批判しているが、皮肉なことに彼の実生活はまさにその時代風潮を反映し、実業家としてひと儲けしようと出版社に出資したり、新案特許に目を向け、James W. Paigeが発明した自動植字機に盲目的に大金をつぎ込んでいた。しかし、もともと正規の教育を受けていなかったトウェインが、自分の事業を起すにあたって、進んで科学の産物を探り入れたとしても、彼が読書などから独学で得た知識だけでは上手く生かすことができず、結局は夢は破れ、金銭的にも多額の借金を負う羽目になってしまったのである。科学の発展を讃えながらも、その恩恵には与かれず、むしろ、そこから生まれる文明社会の歪みに懐疑的になっていくトウェインの、科学に対する愛憎相争う思いでは、気球の中に“home”を見出すことは不可能であった。よってハックが、気球のことを“home”と語りながらも、科学の産物である気球の中でのトム、ハック、ジムの三人は、ひたすら下らない議論ばかりして、個人の性格の持ち味を台無しに

してしまっているのである。そして、作品の半分近くを占める三人の議論の場面も、この作品の欠点の一つになってしまっているのである。

1892年11月24日のトウェインがホールに宛てた手紙には次のように記されている。

...meantime I could write Part II of it, and then, whether they wanted Part II or not, we could add it to the book when I issue. <sup>(16)</sup>

出版社が望まなくても第二部を出すという凄意気込みようである。この手紙を見る限りトウェインがこの作品に大きな望みを抱いていたことが分かる。この作品が書かれた1892年頃のトウェインは、数々の無計画な投資が祟って経済的に苦しい状態にあった。故に、もしもこの作品が当たり、シリーズ化を実現することが出来たならば、生活も少しは楽になるはずであった。このことから、この作品にはトウェインの経済的野望も込められていたと考えられるのである。しかし、結果的にトウェインはシリーズ化は勿論のこと、第二部さえ書くこともなかった。この背景には『トム・ソーヤの空中旅行』を発表する際の修正の問題<sup>(17)</sup>やトウェインの出版社の倒産<sup>(18)</sup>など、様々な原因も考えられるのであるがトウェイン自身がもうこれ以上トム、ハック、ジムの三人を、このような作品の中では生かすことは出来ないと気付いたのではないだろうか。彼らは、まさにトウェインの分身であり、アメリカの、ミシシッピー河の辺の緑に囲まれた楽園でこそ自由に動き回り、生き生きと活躍できるのである。故にそこから離れ、科学の産物である気球の中では、トウェイン同様に生き続けることができなかつたのである。三人を復活させる事によって、もう一度一名を挙げ、経済的にも立て直そうとしたトウェインの試みは、結果的には失敗であったといえるのである。『トム・ソーヤの空中旅行』第一章で、忘れられていく自分の過去の栄光を嘆くトムの心境は、当時のトウェインの心境そのものであったのではないだろうか。

[ 註 ]

1. Mark Twain, Mark Twain's Letter to His Publishers 1867 - 1894, ed. Hamlin Hill (Berkeley and Los Angeles: University of California Press, 1967), 314.

2. Stuart Hutchinson, Mark Twain: Critical Assessments (Helminformation, 1993), II, 219.



3. Ibid., II, 220.
4. Mark Twain, The Autobiography of Mark Twain, ed. Charles Neider (New York: Harper Perennial, 1990), 232.
5. Mark Twain, Mark Twain's Notebooks & Journals, eds. Frederick Anderson, Michael B. Frank, and Kenneth Sanderson (Berkeley: University of California Press, 1975), I, 17.
6. Franklin Walker & G. Ezra Pane, Mark Twain's Travells with Mr. Brown (New York: Russell & Russell, 1940), 278.
7. Twain, Notebook, I, 511.
8. John C. Gerber, Foreword. Tom Sawyer Abroad, by Mark Twain ("Mark Twain Library"; Berkeley: University of California Press, 1980).
9. E. K. Chambers, Rev. of Tom Sawyer Abroad, by Hutchinson, op. cit., II, 221.
10. Twain, Tom Sawyer Abroad, 7.
11. Ibid., 8.
12. Ibid., 56.
13. Ibid., 9.
14. Ibid., 59.
15. Ibid., 48.
16. Hill, op. cit., 326.
17. Tom Sawyer Abroad は、1893年11月から、1894年 4月にかけて子供向けの雑誌 St. Nicholas Magazine に 6回シリーズで連載されたが、その際に St. Nicholas の編集長 Mary Mapes Dodge の、原作を損ねる程の容赦ない削除、修正を受け、トウェイン自身もこのことに不満を抱いていた。
18. トウェインが出資していた出版社 Charles L. Webster and Company は、素人経営が祟り1894年 4月に倒産した。